

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2013年6月6日放送

「第63回日本皮膚科学会中部支部学術大会① 大会を終えて」

和歌山県立医科大学 皮膚科
教授 古川 福実

テーマ「めざせ！鉄人の皮膚科学」

平成24年10月13・14日、第63回日本皮膚科学会中部支部学術大会を大阪市において開催し無事終了いたしました。台風も発生せずに運良く盛会のうちに終わりました。和歌山県立医科大学が担当するのは、昭和34年の第10回大会を故西村長應教授が担当して以来、今回で4回目でした。



初代 西村長應教授



2代目 三嶋豊教授



3代目 青木和夫教授



4代目 松中成浩教授

参加者は、1604名でした（有料一般参加者 1374名、同伴者 5名+ご招待者 225名）。学会の生命線は一般演題ですが、口演 120題、ポスター60題、CPC6題と多くの申し込みを頂きました。大成功で、参加いただいたすべての方々、山本実行委員長、吉益事務局長、金澤組織委員長、教室員、同門、和歌山県皮膚科医会の先生方に感謝申し上げます。

テーマは、「めざせ！鉄人の皮膚科学」とし、皮膚科学のプロフェッショナルとはなにか、を多くの先生と議論し深化させたと思っております。多くの皮膚科学の鉄人に、教育講演をお願いしました。プロ野球解説者 衣笠祥雄氏による「野球から学び教えられたことープロフェッショナルとはー」と題した特別講演は大変好評でした。入団二年目のオフシーズンにリストラされかけ、自分にできる事は何かを必死になって考え努力したそうです。このことに自分のプロ野球選手としての原点があるとのことでした。実に、見事な話術でした。なぜ、このテーマにしたのかと、しばしば質問されました。ある先生から、「衣笠選手が決まったので後付けで鉄人に決めたのでしょうか」とコメントを頂きました。大正解です。

日本皮膚科学会との共同による招待講演は、“New Ways of Using and Understanding Light and Optics in Dermatology” と題した講演を University of British Columbia の Harvey Lui 先生をお願いしました。Harvey Lui 先生は、2015年にカナダのバンクーバーで開催される第23回世界皮膚科学会の事務総長です。大変気さくな先生で御呼びして良かったと実感しています。座長の宮地教授が急病で、急遽、私が座長をいたしました。

本学会の目玉の1つは、CPCの後に行われる鏡頭無心セミナーでした。本学会の支部長を長年努められた福井大学の熊切正信教授をお願いいたしました。鏡頭無心とは、伝説の天才病理学者 天野重安（あまの しげやす）先生の言葉です。天野先生は、昭和31年京大ウイルス研究所教授に就任され、形質細胞抗体産生の確認、ウイルス性白血病の研究をすすめ、また原爆症、結核、肝硬変の研究も行われました。同32年国際血液学会賞を受賞されましたが、昭和39年3月30日に60歳で死去されました。「血液学の基礎」は名著として有名です。鏡頭無心は、「病理標本を診る時は、予見無く心静かに鋭く視よ」という意味とおもいますが、人生哲学にも通じるところがあります。



熊切正信先生の講演は、皮膚病理学の集大成といった感じで、きれいな風景写真とともに印象深いものでした。

シンポジウム

シンポジウムは、和歌山医大が取り組んでいるテーマを取り上げました。

シンポジウム 1 「自己炎症疾患研究の目指すもの」

「自己炎症疾患とは何か？」というところから一步踏み込んで、「自己炎症疾患研究のめざすもの」をタイトルに、皮膚科医がレアな遺伝性自己炎症疾患を追究する意義と今後の研究の方向性について、基礎研究者、小児科医との議論の場を提供しました。和医大からは金澤講師が、古くて新しい和歌山発の遺伝性自己炎症疾患である中條—西村症候群について紹介するとともに、同じくプロテアソーム機能不全病である CANDLE 症候群、JMP 症候群が欧米から報告されたことで、国際的な競争の渦に巻き込まれつつある現状を報告しました。最後に、今後遺伝子解析に欠かせないツールとなる次世代シーケンサーを用いた遺伝子ハンティングの実際について、吉浦孝一郎先生（長崎大学人類遺伝学）にご紹介いただきました。このシンポジウムの内容は、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会雑誌の総説として掲載される予定です。

シンポジウム 2 「美容皮膚科 光老化に対する治療の理論と展望」

“光老化”に焦点を絞り、基礎的な内容から現在のトピックス、そして将来の展望までを含めたシンポジウムでした。紫外線による光老化の機序を最近の知見の紹介と機序から考えられる予防法や治療法の提唱がありました。各論的には、最近のしみに対するトピックスの中から、“アゼライン酸の美白作用”、“レーザートーンニング”、“ヒアルロン酸やボトックス治療”などに関してホットな講演が続きました。和歌山医大は、全国の大学に先駆けて山本准教授が美容皮膚科外来を立ち上げて 12 年が経ちます。サイエンスする美容皮膚科学をテーマとして挙げております。今後も、今回のような企画をとおしてさらに発展させたいと思っております。

シンポジウム 3 「皮膚外科～あなたならどうする～」

「皮膚外科～あなたならどうする～」は、例年、日本皮膚外科学会で開催されており、中部支部学術大会で開催されるのは初めてでした。今回の学会では、悪性腫瘍が 2 症例、慢性炎症性疾患が 3 症例と幅広い分野にわたり症例提示、討論がなされました。2 日目の朝 1 番のセッションで、決して大入りではなかったですが、座長先生はじめ、皮膚外科の著名な先生方により活発な討論が行われ、成功に終わったと思っております。症例ごとに様々な見方、考え方があり、今後の診療、治療にきっと役立つと感じました。

日本皮膚外科学会では、毎年、「皮膚外科～あなたならどうする～」は開催されています。2014 年は和歌山県立医大の山本准教授が主催いたします。

シンポジウム 4 「自己免疫疾患 up to date」

「水疱症の変遷」、「ループスエリテマトーデスへのヒドロキシクロロキン (HCQ) の投

与効果」、「胸腺腫関連自己免疫疾患」、「自己抗体プロファイルからみた皮膚筋炎」「パターンとルールで考える円形脱毛症の治療」が紹介されました。やや、総花的でしたが、個々の研究レベルは高いものがありました。

若手医師と先輩医師による相談会 (M&M)

若手女性皮膚科医師（メンティー）と先輩の医師（メンター）による相談会（M&M）は、メンティーが今後どうやって仕事を続けていくか等女性医師としての仕事の悩みや不安を、メンターに相談できる機会になっています。今回は、27名の先生方が参加されました。講演会では、東山眞里先生と井上智子先生が特別講演をされました。両先生とも結婚、出産、子育て、研究留学を乗り越えてきた経緯をご講演されました。続いて、女性医師がお互いの本音や経験談（なぜ周囲の同僚が辞めていくのか？なぜ続けられたのか？）について、意見交換を行いました。若い先生方がロールモデルを身近に知ること大切なことなので、この会は着実に発展するのではないのでしょうか。

おわりに

和歌山医大主催の学会を大阪で行いましたので、いかに和歌山らしさをだそうかと、苦労いたしました。最も考えたのはシンポの内容です。次に、懇親会、スイーツセミナー、ランチョンセミナーの飲食物に頭をひねりました。展示コーナーには有田市から物産観光PRとして濃厚な甘みがある「味一みかん」のジュースを出展し、学会参加者からも好評のようでした。新宮の鈴焼きは知る人ぞ知る「うまい」ものです。黒毛和牛のお弁当もヒットだったかな？と自己満足しています。座長御礼には、南部の梅干しを、当然のごとくさしあげました。

大阪での学会が終了した約 40 日後に、和歌山市で市民公開講座を開催いたしました（2012年11月24日、於 和歌山県立医大生涯研修センター）。脱毛症は治るか、あざは治るか、膠原病は治るかの三つのテーマで3人の医局の先生に話題提供しました。県民の方に和医大皮膚科が何をやっているのか、少しは理解されたのではないかなと思っている次第です。

何はともあれ、多くの方々のおかげで、成功裏に終わった学会でした。